

介護老人保健施設 しおさい

症 例 概 要 利用者氏名：ご利用者：70代 女性 要介護2

病 名：パーキンソン病 頸椎胸椎後縦靱帯骨化症両変形性膝関節症術後

利用サービス： 令和3年1月～

経 過： 依存傾向と「できない」という消極的な姿勢のご利用者が、自力での脱衣という成功体験と、それに対する周囲の称賛、具体的な方法を伝える支援の実施。病気後の不安に対する心理的サポートを経て、自立的な着脱衣 トイレ動作の獲得 否定的な発言の減少 精神面の安定と、ご本人の能力を引き出すための環境設定と心理面への配慮が、行動だけでなく精神的な自立にも繋がった症例。

内 容

依存傾向が強く、「できない」と何事にも消極的だったご利用者は、特に手先を使う動作に強い抵抗がありました。ご家族からは「自宅のシャワー時にずっと呼ばれて困る」「家事が進まない」といった相談が寄せられていました。一方で、歩行訓練やリハビリには積極的な姿勢が見られたため、職員間で日常動作を観察し、特に着脱動作ができるようになれば介護負担の軽減につながるとの意見が多く上がりました。

本人の性格や心理状態を考慮し、「きっかけ作り」が重要だと判断。食後の自由時間などには洗濯ばさみやキャップを使った指先の個別訓練を行い、入浴時には仲の良いご利用者と一緒に入るなど環境を工夫しながら粘り強く声掛けを継続しました。しかし、自己着脱に対する消極的な姿勢はなかなか変わりませんでした。転機は、職員が他のご利用者の対応で手が離せない時に訪れました。その際、「椅子によりかからずにTシャツをたくし上げてみて」とアドバイスしたところ、ご本人は自ら脱衣に成功。周囲のご利用者や職員からの「すごい!」という称賛が、ご本人の自己肯定感を大きく高める決定的なきっかけとなりました。

これを機に各部署でカンファレンスを開き、支援方法を確立。個別訓練を継続しつつ、声掛けは「がんばれ」といった精神論ではなく、具体的な脱衣方法をアドバイスするなど、具体的かつ実践的なサポート体制に変えました。自分の成果を他者に喜んでもらうことで、さらなる意欲を引き出し、好循環が生まれました。その後、心身が落ち込み「またできなくなったのでは」と不安を口にされた際には、看護や介護が丁寧に話を聞き、リハビリ職員と連携して着脱動作を訓練に組み入れ、不安の解消に努めました。その結果、他のご利用者からも「前よりできるようになったね」「一緒に頑張ろうね」と励ましの声がかかるようになり、ご利用者も「みんなが褒めてくれて嬉しかった」と笑顔で喜びを伝えてくださいました。

現在は入浴時の着脱動作だけでなくトイレ動作も自立し、難しい動作はリハビリ職員や介護職員と共に

学びながら前向きに取り組んでいます。ご家族からは「自宅での生活が安心してでき、家事も進むようになった」と喜びの声が聞かれ、精神面でも「無理」といった否定的な発言が減り、笑顔が増えました。一つ一つの「できない」が「できる」へと変わり、ご利用者はキラキラと輝く自信に満ちた日々を過ごされています。

【看護】：ご利用者の健康状態を把握し、心身の不調時には丁寧に話を聞き心理的サポートを行った。また、不安の原因を特定し、介護・リハビリと連携して訓練内容の調整を行った。

【リハビリ】：指先の個別訓練や着脱動作のリハビリを継続的に実施。具体的な動作方法を指導し、ご利用者の身体機能向上と自立促進に努めた。

【栄養課】：食事環境の整備と支援、健康維持のための栄養管理を実施。

【事務、連携】：行事やイベントサポートによる資格者寄り添い時間確保